



学 藝

令和5年(2023年)3月／第147号

— 特集：新年祝賀会 —



新年祝賀会 理事長あいさつ



会場の様子

◇ 巻頭言 理事長あいさつ.....	理事長 森 富子... 2
◇ 新たな教師の学びの姿.....	副理事長 渡辺 裕之... 3
◇ 新年祝賀会挨拶.....	理事長 森 富子... 3
◇ 新年祝賀会の様子.....	4
◇ サークル等活動紹介 第6回 陸上競技部.....	7
◇ 支部紹介 中野支部・荒川支部・葛飾支部・江戸川支部・八王子支部・東村山支部・多摩支部・稲城支部... 8	
◇ 研究発表会報告 品川区立大井第一小学校・板橋区立成増小学校・町田市立小山小学校・東久留米市立第五小学校...12	
◇ 副校長の活躍 文京区立千駄木小学校・調布市立布田小学校.....16	
◇ 若手教員の活躍 品川区立城南小学校・立川市立新生小学校.....17	
◇ 本部だより.....	総務部・会計部・研修部・調査部・広報部・お知らせ...18
◇ 新年祝賀会～各支部からの報告～.....	20



「新しい時代に考えること」

理事長 森 富子

令和五年になって、新型コロナウイルス感染症はいまだに終息することはなく、それよりは感染症に関する捉え方が変わってきています。慎重な対策をとってですが、今までのような会合が開かれるようになりました。全国での旅行支援もあって、人の移動も活発になり、大人数の催しものが復活してきており、嬉しい反面、心配事も消えることはありません。多くの子供たちとかかわる幼稚園や小中学校、その他の学校並びに高等学校では、卒業式や入学式などの大きな行事を間近に控え、今年への対応をどうするのか、次年度の教育課程をどうするのか、管理職の先生方の困り感が伝わってきます。平常通りとは、どういうことなのか。ある演奏家が、観客が減った穴はなかなか戻らないとしみじみおっしゃっていた言葉が身に沁みます。学校での対策は、日々の消毒や検温などかなり細かな対応がまだに行われており、学校を訪問するたびに頭が下がる思いです。その中でも子供たちにとっては一生に一度の学校での行事などでは、思い出をたくさんつくって巣立ってほしいと思います。

一月二十二日は、三年ぶりに新年祝賀会を対面で開催することができました。東京学芸大学からは國分学長様をはじめ多くのお客様をお迎えすることができました。大変申し訳なかつたのですが、支部からは三名までとの制限の中での開催となり、全体では約九十名の参加をいただきました。久しぶりの楽しい会合でした。当日は、会場のホテル側のきめ細やかな感染対策があり、総務部がコロナ禍の中の祝賀会になることを想定し、多くのアイデアを出しながら準備を行い、当日は他の部の理事の方々や参加してくださった皆様のご協力をいただき、時間通りに進行し終了することができました。来年には、もう少し参加人数を拡大することができたらと思っております。ご参加された皆様、誠にありがとうございました。

コロナ禍が続く中で、同窓会の事業として何ができるかは各部で検討中ではありますが、東京学芸大学の卒業生だけではなく、現役のどの先生にとっても役に立つ事業を展開していきたいと思っております。研修部が中心に行っている管理職選考の講習会にはどの先生も参加できることや、受験者が増えている主任教諭選考のための研修会を増やしていくことを考えています。支部長会のオンライン会議も参加される方が増えてきました。本来なら旧交を温めるためには、対面がいいのですが、一つの工夫として多くの支部とつながるオンライン会議もなかなかいいものだと思います。今年度も「子獅子」を東京学芸大学に寄贈しました。この「子獅子」は学生だけではなく、若い先生方にとっても大切な教科書となると思います。管理職選考で多く利用する「獅子」も新たに作成しています。たくさん活用していただき、先生方の助けになるよう願います。広報部の「學藝」やホームページの充実、調査部の情報収集や会員名簿作成の工夫、会計部の地道な努力による会費や予算の管理などは、これらの事業を拡大するためにはとても大切なものです。どうぞ多くの情報を共有していただき、獅子などを上手に活用していただくことで、支部の皆様と一緒に同窓会の充実を図っていききたいと思えます。

東京都の教員採用選考が今年から変わります。おそらく全国的に今後の採用選考の見直しが行われると思います。教員の質を向上させ充実させるためにも、現職の先生方の役割がさらに重要になってくると思います。同窓会としてどんなお手伝いができるのか同窓会理事役員一同、知恵を合わせて頑張ってまいります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

新たな教師の学びの姿

副理事長 渡辺 裕之

昨年十二月、「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について、中教審より答申があり、「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成」とともに「新たな教師の学びの姿の実現」として、改革の方針が示されました。

答申には、大学における教員養成課程の再構築や優れた人材の確保に向けた教員採用の在り方、教員免許制度の変更など、これからの教師（管理職を含む）が在るべき姿が示されています。ある意味、人事制度や大学での学びにまで言及しているのは画期的であり、今後の動向には大いに注目したいところです。

ここでは、教員免許更新制の発展的な解消に伴う「新たな学びの姿」に焦点を当てて、より学校現場に即した改革の方向性と課題について取り上げたいと思います。

これまで、学校現場では、働き方改革などの社会状況の変化に対応しつつ、多様化する子供たちのために、教育の質の向上を目指して不断の努力を重ねてきたところです。今回の答申の目指すところは、令和三年一月の答申で示された個別最適な学びと協働的な

学びによる令和の日本型学校教育の実現に向けた教員研修の改革であることに他なりません。また、今回の答申には、校長に関する独自の育成指標を策定することが明記されるなど、校長自身の学びを支援することが含まれていることも特筆すべきところです。

昨年八月には、今回の答申に先んじて策定された「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励に関するガイドライン」が示されていますが、改めて職層や専門性を踏まえた受講を、管理職のリーダーシップのもとで奨励することが必要になります。

とりわけ、学校全体の教育力を高め、教員の専門性の向上を目指すには、研修の転換は必須です。そのため、理論と実践を兼ね備えた教育のプロパーを育成できるよう教育行政と一体となつて研修の在り方が再構築されるべきものと考えます。

今後は、喫緊の教育課題に向き合う教師を支える研修環境を整備することが大前提となります。そして、「教員（校長）育成指標」の策定を受け、新たな体系での研修が有効に機能するように、現場感覚での議論が重ねられることを期待してやみません。

新年祝賀会挨拶

理事長 森 富子

本日はお忙しい中、また一段と寒い日になってしまいましたが、東京学芸大学同窓会新年祝賀会においていただきました誠にありがとうございます。三年ぶりに開催することができました。大変大きな喜びでございます。

また、ご来賓として、東京学芸大学 学長 國分様を始め、多くのお客様、顧問の皆様をお迎えできましたこと、心からありがたく重ねて御礼を申し上げます。

コロナ禍での開催であり、かなりの制限のある会ですが、久方ぶりに語り合う喜びを味わいながら、歓談ができればと思います。

ここ会場である東京ガーデンパレスの方でも感染予防のために、大変気を遣っていたいただきました。総務部全員で、どのような形で開催するのがよいのか考えた末での結果ですが、今後のために今日の会がつかっていくことを願っております。

昨年 教員採用の状況の話題が多く

マスコミに取り上げられております。採用試験の状況を見ますと、心配なことも多くあります。実際に大学で教員採用試験の相談を行っていますと、コロナ禍で大学時代を過ごしたことによ

り、人との交流が少ない上に、教員の世界はブラックだとの風評を受け、不安を抱えている多くの学生を見ます。このような対面での会もしばらく開催できない状況でしたので、本音で語り合う時間がなかなかもてなかつたように感じます。現在、教育界には、タブ

レットの活用も進んでおりますが、私は、教員の世界こそ、人と人の付き合いを大切にしていきたいと思っております。

東京学芸大学同窓会の仲間として、皆で支え合っていくことができるよう、同窓会の役割をしっかりと担っていきたいと思います。

どうぞ、皆様、今日は少しでも多くの語り合いができますように、お互いに感染対策をしっかりと取り合っ

令和5年

新年祝賀会

日時 令和5年1月22日（日）12時～

場所 東京ガーデンパレス



一般社団法人 東京学芸大学同窓会

式次第

1. 開会のことば
2. 理事長あいさつ
3. 来賓挨拶
4. 来賓紹介
5. 乾杯
6. 会食・懇談
7. 情報交換
8. 閉会のことば

新年祝賀会の様子

新年祝賀会の様子です。当日は、85名の参加がありました。そのうち、42名が各支部からの参加者でした。

今回は各支部3名までと、人数を制限して着座による祝賀会でした。テーブルにはパーティーションがあるので、お酒を自分でつがなくてはなりません。再開を喜び合い、どのテーブルも笑顔がいっぱいでした。

初めての昼からの開催でしたが、参加しやすく、今後もこの設定がいいのではないかとのご意見を数多くいただきました。

来年は、参加人数をさらに増やして実施できることを願います。



開会の言葉



会場入口



國分充学長 あいさつ



森富子理事長 あいさつ

参加者数 85名

内訳：来賓・顧問20名 理事・幹事19名 本部部員 4名 各支部から42名



来賓紹介



乾杯

会食と懇談



今回は、座ってゆっくり食えることができました。以前は、料理とテーブルの確保が若手の役割でしたが、それもなく、ゆっくり味わって食えることができました。パーテーションがあって、声はやや届きにくいのですが、笑顔はしっかり届きました。

サークル等活動紹介 第六回

陸上競技部

東京学芸大学陸上競技部は今年で七十二期を迎える伝統ある部活動です。毎年行われる関東インカレや全日本インカレの対校戦に参加しています。その他、全日本レベルの大会から都道府県選手権、記録会など様々な大会に意欲的に参加しています。また、年に数回東京学芸大学競技会を行っています。

二〇二二年現在部員は百六名で短距離男子、短距離女子、中長距離男子、中長距離女子、跳躍男子、跳躍女子、投擲、混成、トレーナー・マネージャーブロックに分かれて活動を行っています。練習日は水曜日、土曜日を全体集合日とし、部員全員が集まります。他の曜日はブロック毎に集合及び練習を行っています。また、東京学芸大学陸上競技部のOB・OGから構成されている獅友会、コーチ・スタッフ十一名のご指導、ご支援をいただきながら活動を行っています。活動場所は東京学芸大学の総合グラウンドです。

陸上競技部は現在部員それぞれが考

えられ、一人一人の色を活かせる言葉である「志」を部の目標として掲げています。この言葉を目標にした理由としては、東京学芸大学陸上競技部の部員として競技を行う以上、一人一人に「志(軸のようなもの)」を持つてほしいと考えたからです。それに加え、「志」を立てた以上は、立てただけで満足する



のではなく、それを達成するためにはどうすればいいのか、部員一人一人に真剣に考えてほしいと思っただけです。

一昨年の関東インカレにおいて男子は念願の一部校に昇格し、昨年は強豪校が多くいる中で戦い抜き、一部残留を果たしました。また関東インカレ、全日本インカレにおいて多くの種目で入賞を果たしました。女子においては関東インカレで四×四百メートルリレーにおいて六年ぶりの決勝進出、一万メートル競歩で関東インカレ、全日本インカレ共に入賞、関東インカレ対校得点においては九位と個人のみならず、女子全体でも力を着実に付けています。

今年はずいぶん以上に飛躍し、部員全員が志を達成し、関東インカレにおいて男子は一部残留、過去最高への挑戦、女子は八位入賞、全日本インカレにおいて男子は二十点獲得、女子は十五点獲得を目指しています。

陸上競技部の強みは「チーム力」です。ブロックに分かれて活動を行っています。日々の練習ではブロックの垣根を越えてトレーニングを行うこともあります。先輩後輩、ブロック関係なくアドバイスをし合える良い関係性が競技力向上に繋がっています。また

対校戦や記録会においてはブロックの垣根を超えて良い関係性が構築されているからこそ、応援の力が大きくなり、選手が持っている力を最大限に引き出すことに繋がっています。

まもなく試合期に入りますが、獅友会、コーチ・スタッフの方々のご指導、ご支援をいただきながら邁進して参ります。

混成ブロック女子ブロック長
新野めぐみ (B類保健体育科三年)



中野区の紹介

中野支部長 **松井 敏**

(中野区立令和小学校)

中野区には、区立幼稚園二園、区立小学校二十一校、区立中学校九校あります。

コロナ禍で書面での支部総会が続いていますが、東京学芸大学の同窓生としての価値ある支部会員の把握は継続できています。

区内では小規模化した学校が増えたため、学校統合再編計画が策定され、中野区初の統合新校が平成二十年四月に誕生してから十五年を経て、ここまでに九つの小学校、五つの中学校、計十四の統合新校が誕生しています。令和六年度に最後の統合新校が開校すれば、十五年以上に渡る学校統合再編が一旦の完結を迎える予定です。

中野区では学校統合再編計画と関連付けつつ、小中連携教育の充実が施策の重点とされてきました。全中学校区単位で年三回のオープンキャンパス、年二回の小中連携教育協議会が全区的に実施されるようになり、学びの連続性を重視した小中連携教育が「オール中野」で推進されてきました。現在は、幼稚園・保育園とのつながりまで広げて、保幼小中連携教育へとその取組を発展させてきています。

子育て先進区を掲げる中野区の近年

の教育施策は、「中野区子どもの権利に関する条例」をいち早く制定し、子どもの声に耳を傾け、意見や考え、思いを受け止め、子どもと一緒に子どもにとって最もよいことを考えることを重視しています。学校教育だけでなく、社会教育そして、地域、家庭にもこのことが浸透し、誰でもが意識できるような取組が望まれます。

現在、中野駅周辺では大規模な再開発が進められています。中野のランドマークでもある中野サンプラザも令和五年七月をもって惜しまれつつ閉館します。区教育委員会の取り計らいで、区内小学校三年生全員がサンプラザの十三階から社会科見学として、中野駅周辺の再開発の様子を見学する機会をいただきました。

子育て先進区中野は、子どもの意見や考え、思いを大切にしていきます。



惜しまれつつ閉館する
中野サンプラザ

荒川区の紹介

荒川支部長 **福留 正也**

(荒川区立第二峡田小学校)

荒川区には、区立幼稚園・子ども園九園、区立小学校二十四校、中学校十校があります。令和四年度の支部の会員は五十名、管理職は二十一人です。

荒川区では、未来を拓き、たくましく生きる子どもを育てるために「荒川区学校教育ビジョン」を策定し、教育活動を展開しています。その中の特色ある取組を紹介させていただきます。

学校司書の全校常駐や学校図書館支援室の設置など、以前から読書活動の充実を力を入れてきた本区では、平成三十年に「読書を愛するまち・あらかわ」が宣言され、学校図書館の蔵書の充実とともに、区立図書館と連携した授業での積極的な活用や家庭の協力による家読など、様々な取組がさらに一層充実しています。

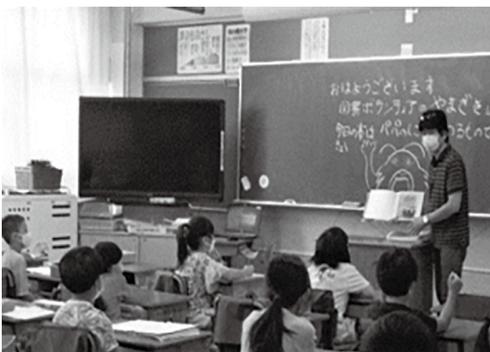
本校においても、保護者・地域人材による読み聞かせボランティアの充実などにより、子どもたちが本と出会い、喜びを感じることができている機会が大変多くなっています。また、「図書館を使った調べる学習コンクール」では、実に多様なテーマについて子どもたちが主体的に学習を進め、自分の考えを表現する機会となっています。

また、校長の経営方針に基づく特色ある教育活動の企画・実践ができるよ

う「学校パワーアップ事業」が予算化されていることも大きな特色と言えます。事業計画は、「学力向上マニフェスト」、「創造力あふれる教育の推進」、「未来を拓く子どもの育成」の三つの柱からなり、校長が作成した全体構想及び予算執行計画に基づき予算が配当されます。

事業内容は様々ですが、教員の指導力向上のために、校内研究会とは別に講師を招聘し、研修会を実施したり、和太鼓や琴の演奏家による体験教室を開催したりしている学校もあります。

荒川区では、これからも学校、保護者・地域、教育委員会が一体となって子どもたちの可能性伸ばしていきます。



「読書プレゼント」
保護者・地域人材による読み聞かせ

葛飾区の紹介

葛飾支部長 宮原 賢二

(葛飾区立末広小学校)

東京の北東の端、北は埼玉県、東は千葉県に隣接する葛飾区は人口四十四万人、面積三十五平方キロ、小学校四十九校と保田しおさい学校、中学校二十四校の、下町の人情に溢れ、子供らしい素直な子供たちが近所の公園で暗くなるまで遊んでいる区です。

「かつしかっ子」宣言を合言葉に、子供たちが知性、感性、品性や体力を育み、豊かな人間性と人格を兼ね備えた次代を担う人間となれるよう「知・徳・体」の総合的な力である「人間力」の育成に向けた教育を推進しています。

昨年には、小中学校の給食費完全無償化を二十三区で初めて実施することを発表し、大変お騒がせしました。我が家の子供たちは既に卒業してしまいい、この恩恵に与れず残念です。

小学校のプールを徐々に廃止して、既存の区や民間の室内プールを体育学習で活用する取組も順調に進み、TGGに全小学校児童が五、六年生で一回ずつ合計二回も公費で体験、中学生のイングリッシュキャンプも人数を増やし、ALETの回数も増え、ICT支援員も週四日、全小中学校に配置されて、授業も校務もサポートしてくれます。学力調査や体力調査においても、小

学校では都の平均を上回るようになってきました。

近年は、共働き子育てしやすい街ランキングで全国トップ、SDGs先進度調査は全国第三位でニュースに登場。

二月には、二十三区で初めてJリーグの基準を満たすサッカー専用スタジアムの建設を目指すことを発表しました。

昭和から平成にかけては、「寅さん」「両さん」「リカちゃん」そして「キヤプテン翼」の町として有名でしたが、令和では何になるのでしょうか。

学大同窓生も管理職から新規採用教員まで各学校で活躍しております。今後も葛飾区にご注目ください。



いくつもの川が流れる水の町
(かつしか郷土かるたより)

江戸川区の紹介

江戸川支部長 木村 紀朗

(江戸川区立松江小学校)

江戸川区には幼稚園一園、小学校六十九校、中学校三十三校があります。令和四年度末に小学校五校、中学校二校が閉校となり、新たに小学校二校、中学校一校が統合新校として誕生します。支部の会員は約二百名で、管理職は四十五名です。

「家庭・地域・学校」の協働による総合的な人間教育を江戸川区教育大綱における基本目標に掲げ、家庭教育の充実、地域での教育活動の実践とともに、学校教育の充実に入れていきます。

小学校ではセカンドスクールやウィンタースクール、中学校ではチャレンジ・ザ・ドリーム(職場体験)等の体験学習に力を入れています。

ウィンタースクールは五年生が二泊三日で雪国に出かけ、現地の方に直接お話を聞き、社会科で学習した雪国の生活を自分の目で見て、実際に体験する活動です。活動の中でも子供たちが一番楽しみにしているのは、スキー教室です。二泊三日の中日にゲレンデに行き、スキー場のインストラクターからスキーを教わります。スキーの経験がない子がほとんどですが、スキー教室の終わりには多くの子がリフトに

乗ってゲレンデを上がり、転ばずに斜面を滑って降りてくる事ができるようになります。初めて親元を離れて過ごすという子供が多いのですが、多くのことを学んで大きく成長して学校に戻ってきます。五年生の行事ではありますが、卒業文集に書く子もいます。校での大きな思い出となっているようです。

コロナ禍での教育活動であり、以前よりも配慮を要する面が増えましたが、体験学習実施に向けて区教育委員会、校長会等で様々な対策を立てながら子供たちの学びを止めないことを目指して取り組んでいます。



ウィンタースクールでのスキー教室

八王子市の紹介

八王子支部長 瀧村博昭

(八王子市立長沼小学校)

八王子市と言えば、最初に思い浮かべられるものが「高尾山」ではないでしょうか。標高五九九メートル、二〇〇七年にミシュランガイドで富士山と共に最高ランクの星三つを獲得しました。遠足シーズンになると、頂上の広場は、さながら花見をする時の場所取り合戦を思わせるほど混雑します。私もかつて迷子になった児童を探したところ、

他の学校の先生の傍で平然とお弁当を食べていた四年生の男の子を思い出します。年間三百万人が訪れる世界一登山者が多い山としても知られる様になりました。

また、八王子市は、二〇二〇年、東京都で初めて「日本遺産」に認定されました。「霊気満山 高尾山」〜人々の折りが紡ぐ桑都物語〜、文字通り、桑の都、かつては養蚕業をはじめとする絹産業が盛んな地域でした。

今でも茅葺き屋根の小泉家屋敷(明治一一年建築)・絹の道資料館で、その歴史に触れることができます。八王子桑志高等学校(元東京府立織染学校)や荒井呉服店(ユーマンの実家)もあります。これは余談です。

学校教育では、毎年、五月になると小教研理科部の先生方が、希望のある小学校に蚕の卵を配布してくれます。



蚕の繭の糸取り

三年生が蚕を大事に育て、繭から糸取りをしたり、繭玉で人形等を作ったりすることが常になっています。

また、市の西には、中村雨紅さんがこの地をモデルに作詞をした童謡「夕やけ小やけ」にちなんだ「夕やけ小やけふれあいの里」があります。中村雨紅さんの展示館や宿泊施設・キャンプ場も併設しています。夏には、清流遊びやバーベキューもでき、市民の大切な憩いの場になっています。

こんな自然あふれる地で子供たちは、健やかに成長しています。我々教職員もこのコロナ禍に負けることなく、子供たちのために教育活動をし続けます。

東村山市の紹介

東村山支部長 鶴田誠二郎

(東村山市立南台小学校)

東村山市は、東京の西に位置し、埼玉県境の小さな街ではありますが、国宝である正福寺やトトロがいる八国山緑地など伝統文化や美しい自然が豊かな市です。公園も多く、住宅情報誌ARUIの「本当に住みたい街大賞二〇二三」では関東圏第九位に選ばれた市です。

東村山市には小学校十五校、中学校七校があります。各校ともコロナ禍においても、児童・生徒の笑顔のために感染に留意しながらも、できることは何か考え抜き、地域と連携しながら教育活動を続けてまいりました。令和五年度は、東村山市第五次総合計画「わたしたちのSDGs」を受け、全小中学校が東村山市SDGsパートナーに登録し、SDGsカレンダー・年間指導計画などを作成し、持続可能な社会の担い手づくりに努めてまいりました。

また、東村山市の教育で大切にしているのが人権教育です。本市にある国立療養所多摩全生園を学びの場とし、ハンセン病の歴史、偏見や差別の恐ろしさや自ら情報を確かめることの大切さなどを実感しています。さらに、東村山市では二月一日から七日までを「いのちとこころの教育週間」と位置

づけ、命の大切さを市全体で考えるようにしています。

小中学校長会では、年間を通して研究を深めております。小学校は「SDGs達成を目指した学校教育の推進」、中学校は「困難な時代における学校と地域の連携」をテーマに、教育長、教育部長等の教育委員会のみなさんのほかに各校学校運営協議会委員もご参加いただき、三年ぶりに集合型で発表会を行いました。

現在も、コロナ感染予防のため、市内同窓生全員が集まることはできませんが、一日も早く、集まって互いを磨きあう同窓会にしていきたいと願っております。



八国山緑地

多摩市の紹介

多摩支部長 吉田 正行

(多摩市立多摩第二小学校)

多摩市内には小学校十七校、中学校九校があり、小学生は約七千人、中学生は約三千人が在籍しています。小学校二十六校全校がユネスコスクールに加盟し、地域や学校の特色を生かした教育活動を展開しています。

多摩市では平成二十一年度から「二〇五〇年の大人づくり」をスローガンにESD（持続可能な開発のための教育）を推進し、平成二十七年

からは子供たちのESDの取組の成果発表と市政や市民へのメッセージを考え発表する「多摩市子どもみらい会議」を開催しています。今年度は、「二〇五〇年の多摩市のために私たちにできること」をテーマに、参加する子供たちがESDの取組から学んだことを基にして持続可能なまちづくりに向けた提言とメッセージの発信を行いました。内容について詳しく紹介します。

今年度は三つの中学校区の発表があり、中学校三校と小学校五校が参加して行われました。第一部では、各学校がESDの取組として「プログラムに関する取組」「未来につながる再生可能エネルギー」「明るく安全な街づくりに向けて」「すべての人を笑顔にするために、自分に進んでできること」「環境保護について」等について学習

の成果を発表しました。第二部では中学校区での協議・意見交換・提言の検討を行いました。話し合いには、多摩市役所の課題に関係する部署の職員（環境政策課、企画課、高齢支援課等）がメンバーに加わり、市の情報を伝えながら的確な助言をしました。第三部では全体への提言の共有及びメッセージ作成の協議、第四部では市政への提言、メッセージの発信とオブザーバーからの意見をいただきました。

このように各校特色を生かした取組を積み重ねる中で、子供たち自身が自分たちの住む街を大切に思い、持続可能な世界の実現に向けて考える力が育っています。



奥多摩伝統の獅子舞を児童がアレンジして披露しています

稲城市の紹介

稲城支部長 高橋 裕之

(稲城市立稲城第四小学校)

現在稲城市内には、公立小学校十二校、中学校六校があり、小学生約五千四百名、中学生約二千四百名の児童・生徒が在籍しています。

稲城市は教育基本方針に「人権尊重の精神」と「社会貢献の精神」の育成、「豊かな個性」と「創造力」の伸長、「学校経営の改革」と「市民の教育参画」の推進、「生涯学習」と「スポーツ」の振興を掲げています

「人権尊重の精神」と「社会貢献の精神」の育成では、すべての大人と子どもが、人権尊重の理念を正しく理解するとともに、生命を尊重し、思いやりの心や社会生活のルールを身に付け、社会に貢献しようとする精神を育ませる。そのために、人権教育、道徳教育及びふるさと稲城への愛着や誇りを育む教育と機会、未来を生きぬく力を育てるための地域社会体験や自然体験、交流活動などを充実するとしています。

市の特色ある教育活動としては「SDGs・ESDの理念を生かした教育」を全校がユネスコスクールとして取り組んでいます。

特色ある行事としては、小学校六年

生の夏と中学校一年生の冬に行う「野沢温泉村宿泊体験学習」があげられます。六年生は緑生い茂る時期に、中学一年生は雪が降り積もった銀世界で野沢温泉村の豊かな自然を体験します。また、宿の皆さんを始めとする村民の皆さんの人柄に触れ、温泉文化も体験します。そして稲城に帰り、わが町稲城の未来、自分たちの未来を考えます。

稲城支部の会員数は四十九名、管理職は校長六名、副校長四名、指導主事二名となっています。コロナ禍から脱するであろう令和五年度は、同窓会の親睦をより密にして、稲城の教育に貢献したいと考えます。



「野沢温泉村宿泊体験学習」

品川区教育委員会研究学校（令和2・3年度）及び品川区 ICT 活用重点校（令和3・4年度）

〈研究テーマ〉 思考力の育成 ～「自己・調整」「協働・創造」「社会・共生」力をつける～

品川区立大井第一小学校長 藤森 克彦

研究を始めた理由

従来の本校の授業は、知識・技能を教え込みで一斉に指導するスタイルがメインになっていた。その結果、高学年になると意欲の持続が難しく学習に飽きてしまう態度として表れていた。そこで我々は、「どのように学ぶか」（学びに向かう力）や「どう活用するか」（思考力・判断力・表現力等）の資質能力の育成に重点をおいた授業を目指していく必要があると考えた。しかしこうした授業は、教員にとってかなり高度な技能が必要であり授業づくりの準備に膨大な時間がかかるのではないかと、問題解決学習といっても結局は形がいかた化し些末な知識ばかりが残っていくだけではないかとといった不安があった。「いつでも、だれでも、できる範囲で」をモットーに、全教員が同じベクトルで系統的に取り組むことを絶対条件として、誰でもできる研究をスタートさせることにした。

研究の目的

児童の心が揺さぶられ、今までの知識では容易に解き明かすことができない課題に思考をめぐらし、今までの知恵を基に新たな考えを創り出していく児童の姿こそが、我々が求めるべき学習の在り方であるとした。そのために、問題解決の活動を通して児童同士で意見や考えを出し合って解決したり工夫しながら協力して企画運営したりするためのスキル、そして「思考力、判断力、表現力等」の資質能力を確実に身に付けさせていく授業こそが、最も優先順位の高い授業改善の方向性であると考えた。

全員で行う思考力等の育成を目指した問題解決学習

すべての教員が実践できるように、「課題を設定し、情報を収集し、整理・分析し、まとめ・表現する」のサイクルを繰り返す探究的な活動を柱とした授業の「型」を明確にした。特に、課題設定、話し合い活動、学習の振り返りの三つの場面にポイントを絞って授業改善の方策を探った。

(1) 「思考コード」の高い学習課題の提示

「今まで分かっていたつもりだったのに、分かっていたことがなかったことが分かった」「理解していたはずだが、どんどん分からなくなった」という児童の姿は、探究的な学習場面の一つである。そのためには「えー、分からない」「どうしてなんだろう」という学習課題の設定が不可欠である。思考コードの高い学習課題を提示することによって、何かに疑問を感じ不確実な状態を誘発させ、どうにか解を求めていくとする創造的な思考、それが本当に正しいことなのかを確かめて判断しようとする批判的な思考を活発にさせることだと考えた。

(2) シンキングツールの活用

思考力を育むためには、まず学習活動に必要な「思考するスキル」を身に付けさせることにした。シンキングツールを活用して自分たちの考えを「広げる」「比較する」「分類する」「理由づける」「構造化する」ことによって思考を視覚化し、自分たちの答えを導いていく。令和2年度末、しながわ GIGA スクール構想による一人1台のタブレット端末が導入され、シンキングツールを活用した活動が日常的となり課題追究の質も加速した。互いの意見や考えを共有し、試行錯誤を重ねながら思考を広げたり深めたりして、正解のない答えを求めていく

学習の積み重ねが、結果として「深い学び」につながったと考える。(3) 学習の振り返りと蓄積・活用

こうした問題解決学習を通して、学習する前と比べ自分が伸びたところ、ここを直した方がいいと思ったこと、友達から学んだこと、他の経験や学習と結びつくことが分かったことなどを観点とし学習の振り返りを書かせた。(概ね5分程度)さらにそれをクラウド上に個々のポートフォリオとして蓄積させた。自身の学習を振り返ることで、自分の変化を実感すること、振り返りによって自分自身を省察して言葉にして残す活動こそが次の問題解決学習につながっていく。

なお、振り返りのポイントは、あくまでも自分の学習の仕方・スキル、思考力等の資質能力に関することであり、「何がわかったか、何ができるようになったのか」といった知識・技能で終わらせないことである。振り返りを習慣化させることで、問題解決学習の過程の段階で、振り返りに書くことを意識して意欲的に取り組んでいる児童の姿も見られた。また直近の全国学力学習状況調査において、思考・判断・表現の理科の平均正答率が都の平均よりも10ポイント程度上がり、かつ全都で無回答が多かった問題も本校ではわずか数%であった。正解がすぐわからなくても、何かしら正解を出していかなければならないという意識が高まってきていることは成果の一つと言える。

思考力等の育成を目指す研究のさらなる推進

このような問題解決学習は発達段階に応じてどの学年・学級でも実践できるようになったが、思考力等のさらなる育成のため令和4年度から次なる取組をはじめた。

(1) 思考力等の資質能力を系統的に育成するための目標の明確化

それぞれの学年において思考力等の資質能力を意図的・系統的に育成していくため、「自己・調整」「協働・創造」「社会・共生」の三つに整理した。「自己・調整」は思考と対話を繰り返し、多様な考えをもとに新しい考えをつくりまとめる力であり、思考力・判断力・表現力等と言っているもので、1年生から育成すべき土台となる力である。「協働・創造」は、友達とコラボレーションして解決したり創りあげたりする力で、「自己・調整」に加えて3年生から指導する。さらに「社会・共生」として自身のよさを生かして学校・地域社会に働きかける力を5年生から指導する。各学年・各教科の中から三つの力を育成しやすい単元を洗い出し、どの単元でどの資質能力を重点的に指導するかを決め、全教員で授業実践を重ねている。

(2) ポートフォリオを活用した学びに向かう態度の育成

学習の振り返りを個々のクラウド上にポートフォリオとして蓄積してきたが、学期単位で蓄積してきた中からベストワーク（満足した学習シーン）を児童自らが選び、自分の変容を1枚にまとめさせている。それをポートフォリオ「ショーケース」というが、自分自身を中期的スパンで俯瞰的に見て、自分の学びがどうだったかを省察する機会となっている。ショーケースは学期末の通知表とともに保護者に伝えたり個人面談などの資料などで活用したりしている。こうした活動はまさに ICT やクラウド環境が充実しているからこそできることであり、この「学びの履歴」を活用して、「学びに向かう態度」「思考力等の資質能力」のさらなる向上を目指していきたい。

令和3、4年度 いたばしの教育ビジョン 研究奨励校

《研究主題》

外国語に親しみ、すすんでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～ICT 機器を活用した外国語指導の工夫～

令和4年11月16日(水) 研究発表会

板橋区立成増小学校 校長 小竹 厚

1 はじめに

平成29年に告示された学習指導要領によって、外国語教育は3、4年生に「外国語活動」、5、6年生に「外国語科」が導入されました。この改定により、一番に不安をもったのは、児童というより教員であることをどの学校でも実感しているのではないのでしょうか。本校も実情は同じで、この研究奨励校の機会を契機に自信をもって外国語の授業ができるようにしようという強い思いをもって研究を始めることにしました。2年間、玉川大学大学院名誉教授佐藤久美子先生に講師をお願いすることができ、また、近隣の小学校の指導教諭には具体的な指導案づくりから授業に関する指導をもらうなどしながら、研究を積み重ねてきたことにより、不安だらけだった私たち教員の士気はみるみる高まりました。

2 研究の内容

本校では研究主題に迫る手だてとして3つの柱を設定しました。

(1) 単元の言語活動の工夫

言語活動は単なる練習ではなく、相手意識、目的意識をもたせ、必然性のある体験的な活動を設定するようにしました。その言語活動は、児童の興味、関心にあった題材を選び、自分の思いや考えを伝え合える活動やコミュニケーションの楽しさを実感できる活動を設定することによって、児童が自己理解、他者理解を深めることに繋げることができました。

(2) コミュニケーションのための input や output

単元構成を工夫することは言語の習得にとって重要です。単元前半は表現に十分慣れ親しむために、主に input を中心に進め、後半は十分慣れ親しんだ表現を使って、自分の考えや気持ちを伝え合う活動 output を行うように構成します。言語材料についての理解や練習の活動にも output の学習場面を設定することも有効です。

(3) 教材・教具の工夫

教材・教具を工夫することにより、児童が安心して活発にコミュニケーションをとることができました。単元や本時のねらいに即してワークシートを活用したり、ふり返りカードに記入したりすることも主体的

な学びに繋がることが分かりました。

ICT 機器の活用は、研究主題の副題にしているところであり、これからの外国語学習にとって必要不可欠なものとなってくると予測される重要な手だての1つです。例えば、タブレットPCを使用してミライシードのオクリンクで児童がカードを作成し、電子黒板を利用してその児童の作品を共有することによって、お互いが見合っただけで交流することができたり、その交流によって相手意識をもってやりとりをすることができたりと有効な手だてとなりました。

3 日常的な学習活動の工夫

(1) **児童朝会(オンライン)**にて校長が英語で挨拶や簡単なやりとりを行っています。また、各学級においては、朝の会や帰りの会で担任と児童と簡単なやりとりをしています。

(2) **English Open Room**では、月曜日、木曜日の中休みに、自由参加でボランティアの English Staff と一緒に英語で過ごすことができるようにしています。オンラインにてアメリカの学校の先生と繋げて、生の英語に触れる機会を作ることもあります。

(3) **国際交流コンシェルジュ**を活用し、オーストラリアの小学生とオンラインで交流し、自分の好きなものを伝え合いました。

(4) **学校支援地域本部**の方に、英語の絵本の読み聞かせをしていただいています。

(5) **児童の放送委員会**は、お昼の放送で英語によるアナウンスを入れています。

(6) **校内環境整備(掲示物等)**

4 終わりに

児童が興味・関心をもつテーマについて必然性のある言語活動を設定することで、コミュニケーションの楽しさを実感し、活動への意欲を高めることができました。また、発話や発音を聞く活動や、発表ややりとりをする活動の場面で、効果的にICT機器を活用することで、主体的で対話的な学びの姿が見られました。

今後はさらに英語表現を身に付け、英語に慣れ親しむことができるように、校内環境整備や英語活動の日常化を図っていきたいと考えています。

研究主題 「心豊かな児童の育成 ～主体的・協働的な探究学習を通して～」

町田市立小山小学校校長 土田 昇

社会の発展の行く末が見通しにくくなっている現代社会において、私たち学校現場には「社会の中で直面する課題の解決に生かすことのできる具体的な資質・能力の育成」が要求される。これを具現化するコアとなるべきもの、それは「総合的な学習の時間（以後、総合と略す）」で育成されると考えた。しかし「総合」は、学校現場では、扱いづらく、面倒くさいものとしてとらえられてはいないだろうか。

1. 学級総合

一学年に二学級以上の学級を擁する場合、学年内の足並みを揃えることに重きが置かれ、毎年同じ学習材（以降、「材」と表記）、同じ学習時間、同じワークシート…となりがちである。学習の行き先のルールが見え、教師の指示が増えれば増えるほど、子供たちは受け身になっていく。総合の命は「学習の主導権（イニシアティブ）が学習者の側にあること」である。

今回、本校の研究では、学級単位で取り組む「総合」に挑戦した。学級で取り組むことの良さは、個々の児童の思いや考えを反映させやすいこと、考えたことをすぐに行動に移すことができる機動性に富んでいることなどが挙げられる。仲間内がよく見渡せ気の許せる学級集団で、「毎日学校で必死になって友達と取り組む何かがあり」、「自分のしたしごとが、誰かに認められている」など、このような体験を積み重ねていけば「感動する」体験に自ずと出会うことであろう。これらの経験に満たされている子供は、きっと、生きる力に溢れ、素直で生きることにも前向きな「豊かな心」の持ち主として成長していくにちがいない。

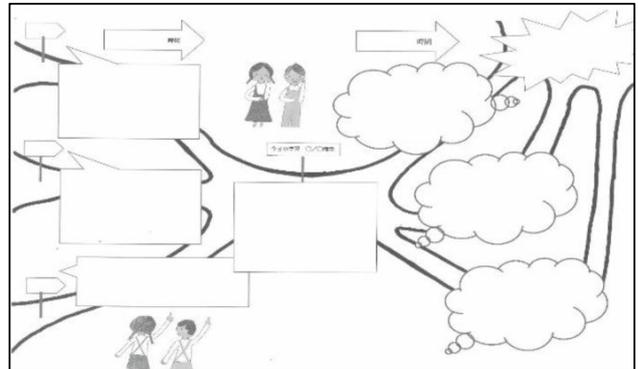
2. 小山小7つの取組

足かけ3年間、校内で研究を続けているが、教職員は、多くの課題に直面し実践の中からいくつもの成果を導き出した。①おやまクエスト②ジェネレーター③学びの地図④学びのストーリー⑤おやまラボ⑥わのじかん⑦子どもの見取りの工夫などである。いくつかをこの紙面を借りて紹介したい。

(1) 学びの地図

児童の側にイニシアティブを委ねる場合、教師は児童の言いなりになるわけではない。凡そ児童たちが考えうる方向性を何パターンも予測し、その可能

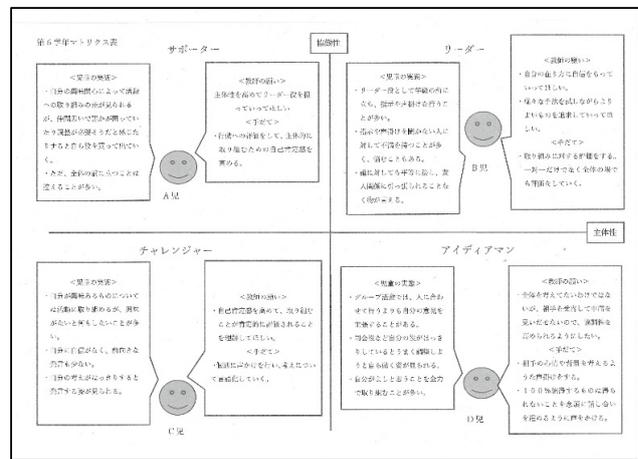
性について下表の「学びの地図」にまとめる。中央



に本時、左側に総合だけでなく各教科の学びや、児童の興味・関心について詳述する。右側半分は、子供たちが取り組む可能性のある活動、右上を学級集団が目指すゴールとした。

(2) 子供の見取りの工夫

主体性(主)と協働性(協)についての個々の児童の姿容について、見取るためのモデルを考えた。あくまでも、その子を理解するためのモデルであり、主体性や協働性の強弱が優劣につながるものではない。



3. おわりに

真の学力（資質・能力）を備えた”おやまっ子”＝能動的学習者となれるよう、生活科・総合的な学習の時間を軸において、教師がジェネレーターなど様々な役割を担い、イニシアティブを児童に委ねた探究的な学習を展開していく。みんなで力を合わせて成し得た時の感動体験を味わわせることで、心豊かな児童を育成する研究を今後も継続していきたい。

令和2・3・4年度 東久留米市教育委員会研究推進校

問題解決の力を育む授業 —理科の見方・考え方をはたらかせて—

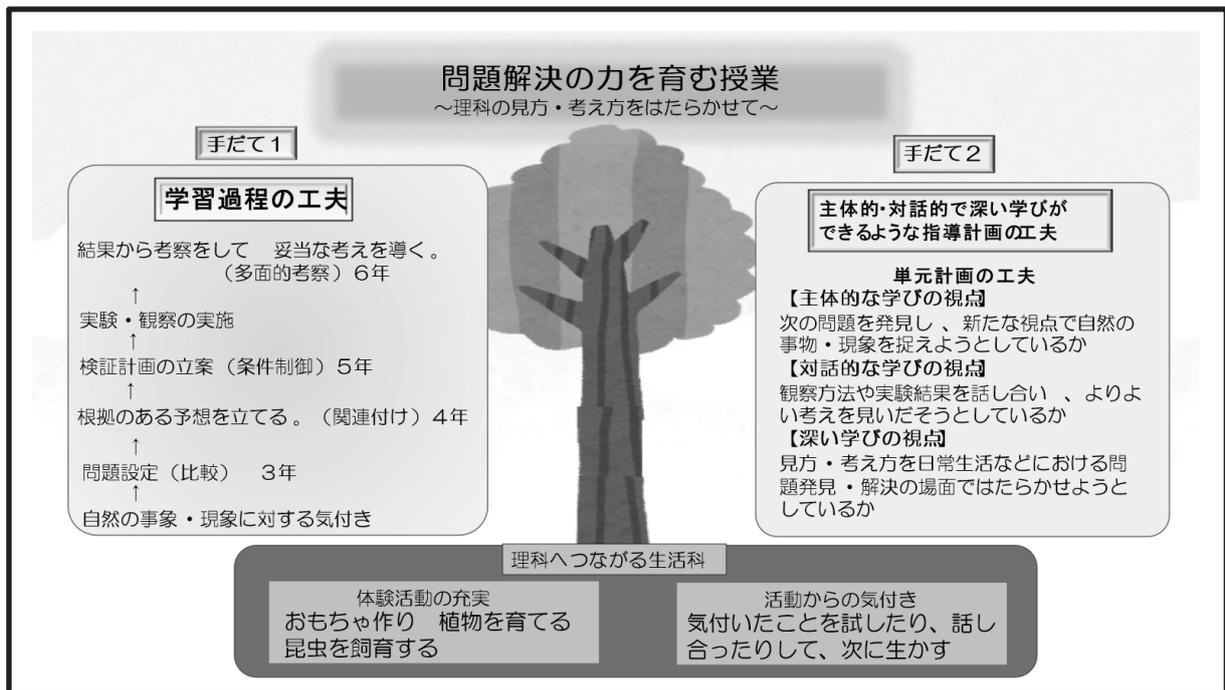
東久留米市立第五小学校長 古矢 美雪

「?を!にしよう」を合言葉に取り組んだ問題解決学習

本校は、令和元年度に実施した全国学力・学習状況調査において、問題解決の力に弱さがあることが明らかになりました。東久留米市が東京都教育委員会から理科教育支援推進事業地域に選定されたこともあり、本校が東久留米市の研究推進校となって、「?を!にしよう」をキャッチフレーズに、令和2年度から3年間、理科教育に焦点を当てて校内研究を進めてきました。

「?を!にしよう」とは、「なぜだろう?」「どうしてだろう?」と思ったことに対して、予想を立て、実際に自分で体験してみて、「ああそうか!」「なるほどな!」と納得し、「楽しい!」「もっとやってみたい!」という更なる探究を促す問題解決の力を育む授業です。

本校の取組を図式化すると、以下のようになります。全学年、「学習過程の工夫」「主体的・対話的で深い学びができるような指導計画の工夫」の2つを手だてとし、授業をデザインしました。



成果は、これらの手だてをとったことにより、子供たちに楽しみながら問題解決の力を身に付けさせることができたことです。また、理科に限らず全ての教科の見方・考え方への汎用性を期待することができ、教科横断的な指導が可能となるということです。

課題は、「清流の町・東久留米」平成の名水百選に東京都で唯一選ばれた落合川の南沢湧水群が通学区域である本校なので、地域資源を活用できる理科の学習もめざしてきました。「メダカのたんじょう」「流れる水のはたらきと土地の変化」「土地のつくりと変化」等の単元ではある程度達成でき、子供たちの実生活との関連を図り郷土愛をも育むことができましたが、これら以外の単元においても、更に教材開発を図る必要があるということです。課題はありますが、研究推進校として取り組んできたことで、理科が好きな子供が増えたことが、大きな収穫です。

多くの人に支えられて

文京区立千駄木小学校 副校長 金子 淳平

四月に副校長に昇任し、本校に着任して早一年が過ぎようとしています。

昇任前まで、副校長の業務を様々な場面で見たり、業務内容について研修等で学んできたりしましたが、「百聞は一見にしかず」とはまさにこのことで、いざ体験してみると思っていた以上に忙しく、五月までは、終わりの見えないトンネルをがむしゃらに進んでいました。しかし、その中でも挫けずに一学期を終えることができたのは、コロナ前に集合で開催された学芸大学新年会で同じ地区の副校長先生から、「初めの一年は確かに大変だけど、慣れてしまえば仕事はルーティーンになるし、自分がやりたいことが見えてくる。そして誰かの役に立っている達成感をこれまで以上に感じるができるよ。」と言われたことが支えになっていたからです。仕事のルーティーンを作るにはまだ時間がかかりますが、達成感を感じることはありました。担任とは違う立場で校内の子どもたちと関わった時や、校長、教職員の役に立った時などちょっとしたことで達成感を味わうことで自分のモチベーションにつなげてきました。

少しずつ仕事に慣れてくると周りが見えてくるようになりました。そこで感じたのは、当たり前のことですが学校は多くの人に支えられているということです。本校はPTAの活動が盛んで、運営委員会では毎回「学校のために」「先生方のために」「子どもたちのために」という言葉が多く聞こえます。

また、本校が交流している秋田県美郷町の仙南小学校の五年生が来校した時には、地域学校協働本部の方々が文京区内を案内してくださいました。教職員は、「対話を通して様々な価値に気付く児童の育成」を研究主題とした校内研究に取り組んでいます。正解か不正解かのみこだわるのではなく、自分とは異なる考えから学べることであることや、それらの意見の中に話し合うきっかけとなる考えがあることに気付くなど、話し合う過程に様々な価値があることを児童が実感できる授業を目指し、日々教材研究に励んでいます。こうした恵まれた環境を生かして、校長の経営方針を実現し、魅力ある教育活動を展開するために日々精進していきたいと思っています。

子どもたちと教職員の笑顔のために

調布市立布田小学校 副校長 石津 孝介

指導主事を四年間務め、まもなく学校に戻るかなあと思っていた令和二年。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う一斉休校が始まりました。四月に学校に戻ってきましたが、始業式・入学式の翌日から再び子どもたちに会えない日々が続きました。それだけでなく、感染症予防のため学校教職員も自宅勤務等で揃わない日々が続きました。先が見えない不安な日々……

よう努めています。苦しい時期もありましたが、おかげさまで教職員の皆さんはチームワークよく感染症の困難を乗り切ってくれています。

子ども・教職員がなかなか笑顔にならない対応といえば、やはりいじめ等のトラブル対応です。特に若手教員は、保護者への対応に難しさを感じます。そこで私は、主幹とともに教員の話や話を丁寧にとともに、電話や面談時に教員の横について一緒に話を聞くようにしました。教員が返事に困っていたり言葉が足りなさそうだったりしたら、すかさずメモを渡すなどして、保護者のご理解を得られるように支援しました。なかなかうまくいっているらしく、教員に「これから保護者に電話するので、近くで聞いてもらっていますか。」と言われることも多いです。教員が安心して対応できるなら、何よりです。

一斉休校が終わり、子どもたちも教職員も学校に戻ってきました。私は、校長の学校経営方針を確認しながら「子どもたちの心に寄り添い、笑顔で学校生活を送れるようにしてほしい」「教職員へ自身とご家族の健康を第一に職務を進めてほしい」「困ったことがあれば自分に対応するからいつでも相談してほしい」と、何度も何度も教職員に伝えていきます。また、私自ら子どもたちや保護者に笑顔で積極的に関わり、時には担任も務めながら布田小学校の安全・安心づくりをリードする

子どもたちの笑顔と成長は、教職員の笑顔があつてこそ、実現するものだと実感する日々です。教職員が安心して職務に取り組めるよう、これからは副校長としてもっている力を発揮していきます。

一期一会

品川区立城南小学校 山口 凌平

私は現在、東京都教師道場理科の部員である。しかし、私が東京学芸大学に在籍していた時には社会学を専修していた。ではなぜ道場は理科で通っているのか。そこには、先輩教員との出会いが関係している。

私が大学を卒業した後、最初に非常勤講師として勤め、算数少人数を担当させていただいた学校は渋谷区立西原小学校であった。この小学校では、理科の授業研究を行っており、私が勤めた一年が、ちょうど全国発表をする年であった。研究授業や協議会、普段の職員室での学年会を通し、理科の研究を学校全体で進めていく先生方の姿に憧れ、私は「自分でできることはないか」、「この研究になるべくたくさん関わりたい」と考えるようになった。現場で働くようになって一年目の私にできることなど多くはないが、それでも関わろうとする私を、当時の先生方は優しく受け入れてくださった。

ある先生は、単元の導入の一時間をともに考え、授業も任せてくださった。この経験からは、主に導入を通して児童が「なぜ学ぶのか」を見出すことが大切さを学んだ。ある先生は、当

時、その先生が入っていた部会の研究授業と一緒に考えてみないかと誘ってくださった。この経験からは主に、授業研究におけるPDCAサイクルの大切さを学んだ。どちらの先生も、授業についてとても楽しそうに話をしてくださったことが印象に残っている。これらの他にも様々な場面で貴重な体験をさせていただき、その一つ一つが自分にとって大きな学びとなった。そういった出会いと、何より先生方と関わる中で、理科の面白さ・魅力に触れて、気付けば今も理科の研究をしている。

私が現在取り組んでいるテーマは、「児童が主体的に学ぶための導入」である。体験から理科的な疑問・気付きを見出し、学習問題を設定する場面の手だてを探索している。ただ体験させるのではなく、児童が、指導要領に示された内容について、「考えたい」と思える体験の場を目指している。また、生まれた疑問や・気付きをどのようにまとめ、問題としていくかについて試行錯誤している。とても難しいテーマだが、同じ職場の先生や道場の先生と相談し合い、楽しみながら研究を続けている。

教員としての成長を目指して

立川市立新生小学校 廣松 逸斗

私は、東京学芸大学初等科教員養成課程数学選修に在籍していました。大中学生活では同じ学科やサークルの友人、教育実習の指導教官の先生、実習校の子供たち等からたくさんのお話を聞くことができ、とても充実した四年間を過ごすことができました。

教員としてはじめの二年間は、臨時的任用教員として勤務をしました。一年目は、算数習熟度担当として教壇に立ちました。教材研究には意欲をもっていました。しかし、一部の子供だけで授業が展開されてしまったり、寄り添いたいという一方的な思いから子供と友達のような関係になってしまったりして、学習指導面・生活指導面で課題が浮き彫りになりました。

二年目は、特別支援学級の担任として同じ学校で勤務をしました。そこでは当時の学級主任の先生から、仕事の取り組み方について一から教えていただきました。また、特別支援学級担任として、生活面・学習面それぞれについて、目標の設定の仕方や指導、手だてなどの基本を学ぶことができました。そして、授業の形式や子供との関係について課題を克服することができ

ました。一方で、子供への指示の出し方や実態に応じた授業づくりの方法等についての課題が新たに生まれました。

その翌年から、初任者教員として、現在の学校に着任しました。幸いなことに、特別支援学級の担任を引き続き行うことができました。現在の学級は、とても雰囲気柔らかく、子供の気持ちに寄り添い、学級が子供の居場所になることを目指しています。子供との信頼関係の築き方や言葉掛けの仕方、実態に応じた指導や支援の方法等、多くのご指導をいただき、少しずつ成長することができています。

また、学校の校内研究がきっかけで、授業のユニバーサルデザインについて知り、全員が分かる授業づくりについて学んでいます。校務分掌についても、前任校で学んだ仕事の仕方を評価していただけて、体育主任や特別支援コーディネーター等多くの分掌を経験させていただいています。

これからも課題を克服することを成長の機会と捉え、子供たちのために尽力していきたいと思えます。

三年ぶりの新年祝賀会

総務部長 青山 直志

令和五年一月二十二日(日)の正午、東京ガーデンパレス高千穂の間で実に三年ぶりとなる新年祝賀会を開催いたしました。ここに至るまで総務部では様々議論をし、準備を進めてきました。

従前のバイキング形式はとれないので、九十名を想定したテーブル着座形式としました。しかし、蓋を開けてみると人数は確定せず、想定と大きく違った場合、計画自体を見直す必要がありました。いくつかの段階を経て、人数を確定させていった結果、ご来賓二十名、各支部から四十四名、本部の理事、監事等二十五名の総計八十九名となったことは奇跡的でした。

各テーブルは五人掛けパーティーションで仕切られていますので、乾杯のビールは手酌という不思議な光景でしたが、吉野尚也顧問の乾杯のご発声でいよいよ新年祝賀会が始まりました。和食のコース料理はとても美味しく、ご参会の皆様にも好評でした。

スクリーンには学大PVが流され、本会の縦と横の糸が紡がれる感覚を覚える穏やかな空間が広がりました。

宴もたけなわ、ご参会の十九支部の方々からお一言いただきました。コロナ禍で支部の活動も停滞しているが、この新年祝賀会を復活の狼煙としたいとの有難いお言葉を多数いただきました。

各支部の活動も再開され、皆様と対面でお話ができる日が来ることを切に願っています。

会費納入に感謝申し上げます

会計部長 高野 剛一

ウィズコロナからポストコロナへの転換が図られつつある状況ですが、各支部、そして各学校におかれましては、日々変化する状況の中で、現状での最善策を講じながら、忙しい毎日をお過ごしのことと存じ申し上げます。

このような中で、各支部長先生をはじめ、会員の皆様には、会費納入に御協力をいただき、誠にありがとうございます。

お陰様で今年度も、一月三十一日現在で、二千五百九十八名の正会員の皆様に会費を納入していただきました。また、七百九十三名の管理職の皆様には、賛助会費を、十名の終身会員の皆様にも会費を納入していただきました。依然として会員の皆様が集まる機会が少ない中、工夫して会費を徴収していただいていることに感謝申し上げます。

今年度も間もなく年度末の決算を迎えます。例年に比べて活動が縮小されていますが、皆様から納入していただいた会費等の収支をまとめさせて頂き、決算報告させていただきます。

今後とも同窓会の予算管理を徹底させ、会計面から同窓会の活動を支えます。まいります。

「獅子」のご活用を

研修部長 貝原 俊明

各支部長先生に頒布をお願いしている学校経営研修テキスト「獅子」は、校長・副校長等の教育管理職選考を受験される方のためだけのものではありません。国や東京都の施策、教育課題、そして法律にも触れ、できるだけ最新の情報を掲載するようにしています。ゆえに学校運営を支える若い先生方から校長先生方まで、幅広く活用できるものとなっております。

昨年度発行した第四三集よりA4サイズに変更し、文字も大きく見やすくなりました。ページ数も増え、内容もこれまで以上に充実したものとなりました。近年では、主任教諭を目指す若手の先生のための対応策なども掲載しており好評を得ております。

より多くの同窓の先生方が手元に置き、日々の修養にお役立ていただきたいという同窓会本部の強い思いもあり価格は据え置いたままです。三月二十日頃に各支部へお届けいたします。次年度の研修会予定です。

【論文研修会】

①五月十四日(日) ②六月十一日(日)
両日とも九時より

【面接研修会】

・九月十日(日) 九時より

【主任論文研修会】

・令和六年二月三日(土) 十五時より

会場【新宿区立富久小学校を予定】

※新年度になりましたら獅子の表紙裏のQRコードよりご確認ください。

次年度の管理職等名簿の準備について

調査部長 小川 優

皆様のご協力のおかげをもちまして、昨年九月に「令和四年度管理職等名簿」が完成し、学芸大学同窓会ホームページ上にPDFで掲載することができました。いつも調査部に大きなご協力をくださり、心より感謝申し上げます。

今後の作業ですが、この二月から、各支部長の皆様に最新の支部の名簿をメールで送信する予定です。四月から令和五年度の「管理職等名簿」を作成する際、これを修正してご提出いただければ、作業も容易になると思います。新支部長への引き継ぎも含めて、どうぞよろしくお願いいたします。

その前に新支部長と名簿作成担当者を決めて、調査部に送信していただく作業がございます。(三月十七日(金)までに) 詳細は同窓会ホームページの支部長会資料をご覧ください。

また、支部長の皆様に特にお願いしたいのは、終身会員の名簿の確認・点検です。誠に申し上げにくいのですが、二十八年以前卒業の皆様は、ご高齢で物故者やご逝去、ご不明の方もおられます。「その他」の欄にご逝去の年を記載し、次の年にはお名前を名簿から削除していく作業が必要となります。

終身会員の登録の仕方は、希望者が支部長から申込書を受取り、ご自分で手続きをする流れになります。詳しくは管理職名簿の巻末やホームページに掲載しています。終身会員を希望される方は所属支部に連絡を取りご相談ください。

研究発表会の周知

広報部長 加納 一好

広報部は年三回の「學藝」の発行とホームページの運営を行っています。

「學藝」は、同窓生同士、同窓会と同窓生、大学と同窓生とのつながりを大切に作成しています。特に昨年度からは大学と同窓生とのつながりの強化に努めています。

今号は、一月二十二日(日)に開催された新年祝賀会を特集しました。短い時間でしたが、各支部からの報告も楽しく、笑顔の祝賀会になりました。その祝賀会の雰囲気や紙面から少しでも感じていただければ幸いです。

サークル等活動紹介は、陸上競技部です。箱根駅伝に出場したこともある伝統ある部を継承する現役の部員たちの頑張りが伝わってきます。さらなる活躍に期待しましょう。

記事や資料をホームページに即時にアップできるようにしました。令和五年度は研究発表会の案内を充実させていきたいと思っています。会員の皆様の学校の研究発表会の案内ができましたら、ぜひ広報部長(渋谷区立幡代小学校)までご連絡ください。案内をホームページに掲載します。

同窓生の学校の研究発表会に皆で参加しましょう。

【お知らせ】

副理事長の担当は次の通りです。

◎副理事長の担当支部

渡辺裕之副理事長・研修部

千代田、中央、大田、渋谷、足立、

葛飾、府中、日野、東久留米、西

東京、瑞穂、都庁(十二地区)

稲葉孝之副理事長・総務部

中野、杉並、練馬、昭島、町田、

狛江、多摩、羽村、あきる野、奥

多摩、学芸大(十一地区)

茅原直樹副理事長・調査部

豊島、北、荒川、江戸川、青梅、

小平、東村山、国分寺、福生、清

瀬、高等学校(十一地区)

石川加子副理事長・会計部

文京、台東、墨田、江東、品川、

八王子、立川、三鷹、調布、国立、

檜原、特別支援学校(十二地区)

篠原敦子副理事長・広報部

港、新宿、目黒、世田谷、板橋、

武蔵野、小金井、東大和、武蔵村

山、稲城、日の出、島嶼(十二地区)

〈令和五年度

同窓会総会について〉

・日時

令和五年六月四日(日)

総会 午後零時～

講演会 午後二時十五分～

・開催方法

東京学芸大学講義棟S410教室から限定ライブ配信

会場での参加方法については後日、お知らせいたします。

〈送付停止について〉

「學藝」一四八号から昭和二十一年以前卒業の方への送付を原則停止させていただきます。昭和二十一年以前卒業の方で送付の継続を希望される方は、担当へお知らせください。

それ以外でも送付が不要な場合は担当へお知らせください。

連絡先

広報部終身会員担当

荻久保 剛正

板橋区立板橋第一小学校

電話 〇三(三九六一)〇一〇〇

FAX 〇三(五三七五)五七六〇

◇ 編集後記 ◇

「學藝一四七号」の作成には支部紹介に八支部、研究発表会の報告に四支部、副校長と若手の活躍に四支部と、多くの支部の皆様のご協力をいただきました。ありがとうございました。

コロナ禍でも教育活動を充実させようとする各区市の取組、特色ある研究発表、多様な中にも喜びを見出す副校長や希望をもって成長しようとする若手教員の心意気など、編集していただくことの多い内容ばかりでした。

「學藝」を充実させていくためには会員皆様のご支援ご協力が不可欠です。今後ともよろしくお願いいたします。

記事にできる、或いはしたい情報がありましたら、ぜひお知らせください。(広報部)

学藝 第一四七号

発行 令和五年三月

東京学芸大学同窓会理事長

森 富子

東京都文京区小石川四の一の二二
電話〇三(三八二)七二五一(代)

URL <http://www.o-gakugei.org>

印刷 日本ハイコム株式会社

東京都文京区関口一の十九の二
電話〇三(三三五)四四四一

新年祝賀会

～各支部からの報告～

1月22日（日）に開催された新年祝賀会での各支部からの報告の様子です。



港支部



荒川支部



板橋支部



大田支部



町田支部



散会 またお会いしましょう